

# 清掃、釣り、ボート— 楽しみ通し川の大切さ伝える NPO法人北上川サポート協会

川崎といえば北上川、そしてEポート大会。平成7年から続く同大会を主管として支えているのがNPO法人北上川サポート協会吉田達男理事長、会員52人。指定管理者として市の川崎防災センターを管理し、河川調査船「ゆはず」を運行しているほか、砂鉄川の釣り大会、ほたる探偵団、川の清掃など、行政や地域と連携しながら川に親しむ活動を展開しています。

「川で遊ぶのは面白い。この楽しさを子どもたちに伝えたい、というのが活動の原点」と同会の齋藤一公事務局長。Eポート大会では約150人のボランティアスタッフが束ねますが、こ



船を使っての北上川の清掃を続けている北上川サポート協会

の大会が続いているのも「楽しいから」。「川崎には参加型の祭りがなかった。何かしたい人がスタッフに加わっているし、自治会や職場など、大会参加の半分は地元川崎のチーム」と胸を張ります。

地道な活動も続ける同会。船を使つての北上川の清掃はこの5年間、春秋の年2回行い、川面から木に引つ掛かっているビニール袋や水際の空き缶などを回収しています。

清らかな水のシンボルといえるホテル。同会は7・8年、13・14年、19・20年にほたる探偵団を結成し、子どもたちと調査を行っています。門崎にはホテルがなかったのに、10年の水害以降に河川改修した風呂川などで17年ごろから多く発生している。コンクリート護岸でない多自然型工法は、効果があるようだ。今後も見守り続けたい」と齋藤事務局長は川への思いを語ります。

地元川崎中では、3年生がEポート大会に出場し卒業するのが恒例に。舞川中、大原中など、市内の他の地域の学校やPTAのEポート、カヌー体験も受け入れています。川の面白さを知る子どもたちが将来、この川の大切さを次世代に伝えてくれる。違いありません。

# 志縁をつなぐ

今や地域課題を解決するために欠かせない力となったボランティアや市民活動など特定の目的の下に集まった人たちが構成される志縁型共同体、「アソシエーション」型組織の活動事例を紹介します。



市街地に人を呼び込もうと11月9日、千厩町のまちの駅で行われた「自慢の鍋フェスタ」には、地元食材を使った9種類の鍋料理が勢ぞろい。来場者は熱々の品を食べ比べました

## 「商店街に人を呼び込みたい」 JaJa馬プラザを核に イベントでにぎわいを創出 協同組合千厩新町振興会

モーターゼーションの進展と郊外型大型店の進出などにより、中心市街地はかつてのにぎわいを失いつつあります。そんな中、市街地に人を呼び戻そうと季節ごとにさまざまなイベントを企画しているのが協同組合千厩新町振興会(金野茂理事長、組合員33人)です。

同会は、平成17年12月にオープンしたまちの駅「新町JaJa馬プラザ」を指定管理者として管理運営。まちの駅には地元産直グループとイタリア料理店がテナントとして入居し、乗用車約20台の駐車が可能だ。

「中心市街地に核店舗がほしかった」と金野理事長。「千厩には以前、本町の東愛デパートという核店舗があったが閉店。今はまちの駅が核店舗として機能している。駐車場をイベント会場として使えることは大きい」と続けます。

同会は今年度、まちの駅3周年に合わせて、市の地域おこし

事業を活用しせんまや夜市とタッグを組んだ9月のJaJa馬ミュージックフェスタ、市内の食の匠を招いた10月のスローフード市、地産地消を進めようとした11月の自慢の鍋フェスタなど5事業を行いました。食がテーマのイベントは、「まちの駅」のテナントで組合員でもある、農家の皆さんでつくる「せんまや青空市組合」があるからこそ」と金野理事長。まちの駅が



上 9月13日行われたJaJa馬ミュージックフェスタには15組のバンドが出演。ライブを楽しむ若者が集った街はいつもと違う表情を見せました  
下 同日には荷車市も行われました

「まち」と「さと」の交流拠点となっています。平成12年、街路の区画整理が完了した新町商店街。その区内で「シャッターが下りている店は1軒もない」と胸を張る金野理事長。「商店街の売り上げは、この景気だし、落ちていると思う。しかし新町は落ち方が緩やかなのではないかと。まちの駅建設も、区画整理したからこそ実現できた」と分析します。

心して入れる。「安心して来店くださる人や興味を持って眺める人など、よい効果がある」との反響を得ました。19年には第2弾となるポスター「自閉症の子どもたちにはたくさんのお母さんが必要だ」とを大町商店街との協働で制作。商店の人たちと子どもたちが一緒に登場するポスターを制作する過程で、子どもたちとお店の人たちが顔見知りになり、自閉症への理解が一層深まりました。

## 商店街と連携して 自閉症の人に優しい街づくり

NPO法人いわて発達障害サポートセンター「ええ町づくり隊」

自閉症の子どもたちが地域の中で豊かに自立して暮らせる町をつくりたいとの願いから15年に設立された「ええ町づくり隊」(熊本葉一代表)。19年9月にNPO法人の認証を受けました。現在教育、医療、福祉に携わる約20人で活動しています。

同会は▽自閉症児者が地域社会で暮らす技術の獲得▽地域社会の自閉症への理解と支援が必要と15年秋、保護者との協働でポスター「自閉症のことをわかってください」を制作しました。大町商店街でポスターを張ってもらい、その結果保護者と商店から「ポスターの店には安



上 大町商店街との協働で19年作成したポスター。6枚組のうちの1枚  
左 自閉症の子どもたちが商店街での買い物体験する「ええ町探検隊」

17年から年数回ずつ行っている「ええ町探検隊」は、子どもたちがボランティアとともに商店街で買い物をするプログラム。協力してもらう店には入り口にステッカーを張ってもらいました。現在では協力店が100店舗近くに増え、子どもたちも店の人と顔見知りになって、日ごろの買い物などができるようになりました。

「活動を通じ、自閉症への理解、そしてその子どもたち自身を分かち合ってもらえるようになった。商店街の皆さんからも『自閉症だけでなく、どんな人も一層優しく受け入れられる商店街にしたい』と語っていただいています。この信頼関係を築けたことが何よりの成果」。熊本代表は穏やかに語りました。